

# 朝日町におけるリバーカヤックを取り入れた教育の試み

## A trial of an education with river kayaks in Asahi town

遠藤 牧人

ENDO Makito

The author is an educator who loves paddling canoes (especially river kayaks) very much. He found in his paddling life that paddle sport is very effective to educate a man. In 2008, he whose job is a producer of cooperative activities between his university and local areas, tried an education with river kayaks in Asahi town, Yamagata. Asahi town, which has a slogan; "The whole town is a museum, all residents are curators", is a suitable area for such a lesson as he gave. He thinks though he had many difficulties to accomplish his lesson, he obtained with many aids, some fruits which he could hardly do without river kayaks. In this essay, he reports his trial and considers possibilities of an education with river kayaks.

### 1. はじめに

筆者が初めてリバーカヤックを漕いだのは、東京在住時の1986年のことである。アウトドア関係の先駆的な雑誌の編集者として、仕事の中で覚えたのが始まりである。水面を音もなく自由に移動したり回転したりできるこの小さな舟は、今までに出会ったどの乗り物よりも自然に近く、親しみがわいた。パドルを握って漕ぎだしたとき、地面を歩くよりもむしろ自然に体が反応したのを、今もはっきり記憶している。山の中を歩いて丸一日かかる場所へ、わずか2～3時間で到達し、自重が10倍もあるオートバイより積載能力に優れたこの乗り物との出会いは、筆者にとって大変衝撃的で、以来、リバーカヤックは筆者にとって自らの人生を語る上で欠かせない存在となつた。しかし、度重なる転職で環境が変わり、いつしかリバーカヤックはやや遠い存在へと変化していった。

1993年春、筆者は山形に移住し、本学の教育に携わるようになった。最上川で時折見かけるリバーカヤックは全長2メートル台前半で、筆者がかつて乗っていた舟より1メートルほど短くなっていた。時代の移り変わりを感じたが、水面をクルクル回転しながら下っていくカヤックの集團を見ているうちにいつしか、「リバーカヤックを大学教育に取り入れたい」と漠然と考えるようになった。

本稿は、2008年度、筆者が4年にわたって提唱し続けてきたカヌー（特にリバーカヤック）を取り入れた教育活動が、本学の「芸術とデザインによる廃校活用と地域教育」（2006年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択）の一環として朝日町で実現したのを機会に、大学教育におけるリバーカヤック導入の有効性を論じるものである。

なお、本稿には「カヌー」という言葉が度々出てくるが、ここでは、シングルパドル（ブレードが片側だけのパドル）

で漕ぐ狭い意味でのオープンデッキカヌーではなく、ダブルブレードのパドルで漕ぐカヤックを含む、広い意味で使用する。本稿で意味する「カヌー」とは「舟に固定されたオールではなく、舟から分離したパドルを使用し、前方に向かって漕ぐ、手漕ぎの舟の総称」とご理解いただきたい。

## 2. 転覆しても起き上がる安全な舟の魅力

さて、筆者がリバーカヤックを再開するにはいくつかのハードルがあった。初級者の段階で漕ぐことを休止して数年が経過し、転覆時に起き上がる技術、エスキモーロールを身につけていなかった筆者は、最初から一人川へ出て練習するのは危険だと考えた。指導者と安全に練習できる環境が必要であった。

2001年夏のある日、蔵王でカヌースクールを開催している模様がテレビで放映された。時々前を通過する池のように小さな湖だったが、基礎を復習するには、そして何よりエスキモーロールをマスターするにはうってつけの環境だと考えた。さっそく入会して練習を再開した。十年を超えるブランクがあるとは思えない程、自然に漕ぐことができ、その日のうちにすべての復習を終えることができた。

次の週末には早速、新潟の阿賀野川へメンバーとツーリングに出た。交通法規に従い列を作りて走行するオートバイや自転車のツーリングと違い、リバーカヤックのツーリングには、自らの技量と好みによって、それぞれが異なるラインを漕ぐ自由がある。筆者は調子に乗って上手い人の後を追って少々波の高いところに入った瞬間、<sup>ちん</sup>沈（転覆）してしまった。エスキモーロールのできない筆者は脱出して泳ぐはめになったが、素早く仲間に救助してもらった。（このとき救助してくれたK氏には、後にご子息を本学に進学させてもらったほか、学内外のカヌー関連のイベントでもお世話になっている。）一人だったら延々と泳ぎ、舟を放棄しなければならなかつたかもしれないが、仲間に救助してもらったおかげで、その後の酒の肴に話題を提供するだけで済んだ。

日常は様々な立場でそれぞれの生活を送っている老若男女が週末には川面に集い、たとえ初対面でも助け合い、時には仲間の命を救ったりしながら楽しむスポーツ、そ

れがリバーカヤックなのだと再認識させられた。このスポーツには人を育てる何かがある、と直感的に悟った筆者は、その日以来、リバーカヤックを大学教育に活かす方策を真剣に模索するようになった。

そんな折、当時、筆者のゼミにいたアメリカ帰りの女子学生と、カヤックの話をする機会があった。「カヤックってひっくり返ってもすぐ起き上がるから楽しいですよね！ 私はアメリカでカヤックを習ったけれど、スクールに入ったその日からエスキモーロールを習いましたよ。」——彼女のこの一言は目から鱗であった。日本で一般的に行なわれているカヤックの指導方法では、エスキモーロールはある程度漕げるようになってから教えるものとされているし、当時所属していたクラブにはロールをマスターしているものがほとんどいなかつたからである。

しかし、ちょっと考えてみれば、カヤックとはそもそも狩猟するために考案された舟なのだ。冷たい海でクジラと格闘して沈しても、すぐさま起き上がるようには設計されているのである。その性能を活かせないで正立した状態でだけ漕いでいるパドラーは、実はカヤックを半分も楽しんでいないのではないか？ そして、この技さえ確実にこなせれば、めったなことでは仲間に迷惑をかけずに川下りを楽しめるし、ダウンリバー（川下り）の安全性が飛躍的に高まるのである。

スキーや自転車、オートバイ等で転倒すれば、大なり小なりダメージがあるし、時に命に関わる大けがになることもある。しかし、カヤックの沈は、たとえ激流であつてもエスキモーロールが確実にあがれば、ほとんどの場合、少々息が上がる程度で目立つたダメージはないのである。これは、他の乗り物にはない、カヤックならではの大きな魅力である。もし大学教育にカヤックを取り入れるなら、第一に自分が完璧にエスキモーロールを習得しなければならない。そう思った筆者は、2001年12月、教則本を購入し、室内でイメージトレーニングを開始した。

2002年春、筆者は初めてリバーカヤックを購入した。全長250センチ弱のこの舟は、安定性はあるがスクールで貸し出す初心者用の舟ではなく、激流下りで世界の一流選手が操る姿が雑誌に度々掲載されていた。乗っているだけで自分もいつかは……という夢を持つことができた。練習にも自然と熱が入った。イメージトレーニングの甲斐あって、エスキモーロールは練習を開始したその日に

成功し、数週間後には前後左右どこからでも連続で何十回も起き上がるまでになった。地上で転んだ時、顔や頭を打たないように手をついて防御する、それよりもっと自然に体が反応するまで、徹底的に練習した結果である。完全に世界は変わった。<sup>ちん</sup>沈して泳ぐ恐怖から解放された筆者は、水中の世界をも堪能できるようになっていた。

こうして一人で好きな時に漕ぐ自由を獲得した筆者は、所属するクラブの活動とは別に、様々な川を巡り歩き、仲間を増やしていくことになった。また、リバーカヤックの普及には川での水難救助技術が欠かせないと考え、2003年5月にはその講習会に参加し、ライセンスを取得了。ここで出会った仲間とは、後にレスキューチームを結成し、初級者を集めてはリバーカヤックとレスキューの講習会を開催するようになった。

そんな筆者が再認識したリバーカヤックの魅力は、以下の通りである。

- 1) 自然に最も近く、漕ぐだけで誰もが、自然との一体感を味わえる乗り物である。
- 2) 進む、止まる、曲がる、起き上がる、ジャンプする、等、すべての動きをパドルと体重移動、腰のひねりで行なう、体と一体化したきわめてシンプルな乗り物である。
- 3) ひっくり返ってもダメージなく起き上がる、類い稀な乗り物である。
- 4) 人類の歴史や文化を学ぶきっかけを与えてくれる乗り物である。(その歴史は1万年を越えると言われる。)
- 5) 素材と形が性能を大きく左右し、色が与える印象も大きいので、デザイン的にも興味深い乗り物である。
- 6) 不測の事態に遭遇した時、即座に状況を判断し、臨機応変に対応する力を養ってくれるスポーツである。
- 7) 常に仲間と助け合う必要があり、他者理解、他者との協調を学べる恰好のスポーツである。

これらの魅力を備えたリバーカヤックの世界に身を置く教育者として、その恩恵をいかに大学教育に活かすか、そのために筆者が試みた実例を以下に示したい。

### 3. 大学教育に取り入れるまでの課題

さて、前章で述べたような準備を整えた上で、筆者は本学の教育にリバーカヤックを取り入れてもらうべく、いくつかの提案をした。しかし、そこには越えなければならないいくつもの高いハードルがあった。

2004年、エクステンション事業の担当となった筆者は、「自然と文化の学び舎」～月山・最上川～と題した1泊2日の公開講座を企画・提案し、その中で月山湖でのカヌー(リバーカヤック)体験を実施する運びとなった。

この講座は学生ではなく一般市民を対象にしたものであった。一般市民を対象とした講座で先鞭を付けたのに理由がある。当時、筆者は情報デザイン学科グラフィックコースに所属していたが、その専門科目としてリバーカヤック講座を開講することは、いかなる理由付けをしても不可能に思われたこと、また、教養科目として提案するにしても、安全上、また用具の調達の条件等から、受講人数を最大15名程度に制限する必要があり、理解が得られそうもなかつたこと、などである。本学のような芸術・デザイン系の大学で、学生にリバーカヤックを体験させるには、相当の覚悟が必要だと感じていたのである。

そこで、筆者は「教員が大学を出て一般の受講者とともにホテルに宿泊し、学内では接することのできない教員の一面を披露することにより、本学の新たな魅力を広く一般に紹介する」ことを提案したのである。このようにすれば、普段担当している専門に囚われることなく自由に講座を開けるし、また、受講人数に制限を設けやすいと考えた。全学の教員に幅広く協力を要請し、カヌーで知り合った山形大学の佐藤泰哲教授(陸水学)にも講師を依頼した。全5講座のうちの一つとしてカヌー体験を実施することになったが、残念ながら、悪天候に阻まれ、ホテルの一室で座学を開いただけで終わってしまった。翌年も同様の講座を企画したが、財政の都合上、受講料を値上げしたうえ前日の宿泊を廃止した影響もあってか、受講者が思うように集まらず、休講となってしまった。

2006年の秋、本学の「芸術とデザインによる廃校活用と地域教育」が文部科学省現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)に採択され、学内でプロジェクトが公募された。ここでも筆者は最上川をフィールドにしたカヌー講座の企画を提案したが、不採択となった。

不採択の理由は、当時の書類によれば、舟や周辺装備の運搬、アシスタントコーチの謝礼等に経費がかかる割には対象人数が少ないと、地元との連携が不明確（これは審査員の認識不足もあると考えるが）、などであった。

2007年4月、筆者は配置換えによりグラフィックコースを出て芸術工房ネットワーク（前出の「芸術とデザインによる廃校活用と地域教育」として2006年度文部科学省現代GPに採択）の主担当となった。専門科目であるグラフィックから自由になったのを機会に、リバーカヤックを漕いで世の中を観たり考えたりするチュートリアル（教員が教育／研究活動の一環として企画する課外活動）「漕観塾」を立ち上げたが、募集において特に尽力しなかつたためか、参加者が集まらなかった。こんなに楽しい世界なのだから、学生は簡単に集まる、と確信していた筆者にとって、これは大誤算であった。本学のような芸術／デザイン系の学業に学生のベクトルがはつきり向かっている大学において、芸術／デザインに直接関係ない活動に学生の参加を促すには、確固たる募集の仕組みを作った上で、相当な努力が必要だということを学んだ。

#### 4. 実験表現研究会との出会い

さて、そんな筆者に転機が訪れたのは、2007年秋のことである。中途退職した教員から実験表現研究会の顧問を引き継いだのである。

このグループは朝日町上郷地区にて、大学での専門に囚われず、自由な表現活動を実現していた。彼らが活動の拠点としていた旧上郷小学校の目前には、筆者たちがリバーカヤックを漕ぐ最上川が流れ、そこから車で10分程のところには、全国からパドラーが集まるカヌーランド、通称「タンの瀬」がある。まさに、恰好の条件がそろっていたのである。筆者は自分がリバーカヤックを漕ぐこと、自分が一緒に活動するなら、ぜひリバーカヤックを使った表現をしたいことを伝え、顧問を引き受けた。

ちょうどその頃、筆者は、朝日町で写真の授業をしたという内藤正敏教授とその学生たちを、町内大沼地区にある浮島稻荷神社に案内することになった。民俗学の権威でもある内藤教授は、朝日町を訪れるのは初めてということで、撮影に先立って様々な民族学的な調査をし

た。筆者はそのお手伝いをさせていただいたのだが、教授のこういった仕事の進め方は、筆者に大きな刺激を与えてくれた。

撮影を終えてしばらくたった頃、アシスタントの大学院生と合宿先で酒飲み話をしていた時のことである。彼は、「大沼の浮島がどんどん増殖したら面白いですね。」と言い出した。確かに面白いと思った。そして半分冗談、半分は本気で「よし、僕が増殖させよう。ただし、あそこは神様の池だから別の池でやってみよう。たくさん増やしたらカヌーで最上川に連れて行って、流れの中で遊ばせてやろう。きっと実現してみせる。」——こういうリラックスした環境で学生と対話する時間は、筆者にとって大変貴重である。

さて、話を戻そう。このような経緯で、筆者は2008年度の芸術工房ネットワーク活動において、実験表現研究会とともに朝日町旧上郷小学校を拠点に活動することになった。9月に開催したイベント「上郷採祭」の企画の段階で、学生たちから、「今年は、単に表現の場所として廃校を使わせてもらうのではなく、地域の人たちと共に作る表現のお祭りを開催したい」という提案がなされた。前年の展覧会では、単に会場を借りただけで、地域との交流、その地域で過ごすことによって自らの表現を追求する行為が不十分だった、という反省をふまえての提案であった。もっとその土地に根ざした、その土地ならではの表現を追求したい、という学生たちの思いがひしひしと伝わってきた。そこで、筆者も学生たちと思いを一つにして、専門のグラフィックを離れ、リバーカヤックを使った自分なりの表現を追求してみることにした。

チュートリアルというのはいくら参加して成果を上げても学生にとっては単位にはならないし、教員にとっても担当コマ数にはカウントされない。それは、何も見返りを期待しない無償の行為である。学生と担当教員が互いにそのことを納得し合って一つの目的に向かって協力し合い、成し遂げる活動である。いわゆる「教える／教えられる」という一方通行になりがちな教育とは一線を画した、教育の新しい形がそこにはあるのではないかと、筆者は日頃から感じていたが、それは、リバーカヤックで川下りをするとき、メンバー相互が協力し合う姿勢にも相通じるものがあるのでなかろうか？ 筆者は、そのようなことも、この機会に確かめてみたいと考えた。

## 5. リバーカヤックを教育に活かすための様々な下準備

筆者は自分なりの「地域に根ざした水環境表現」を通じて、自らの考え方を学生たちに伝えようと決めた。表現の核となるのは、あの晩、大学院生との対話の中で思いついた「増殖して山上の沼から降りてきて、最上川の流れの中で戯れる浮島」である。

しかし、この手の作品には、確固たるコンセプトとそれにまつわる物語が必要である。そのために、まず、自らがフィールドとする最上川とその周辺の水辺の環境や歴史について、お年寄りを中心とする地域住民の取材や文献購読を通して、自分なりにできる限り調べてみることにした。そして、その結果、次のようなことが分かった。

最上川に上郷ダムができる1962年以前、五百川峡谷の途中に位置する上郷付近は大小の瀬が続くかなりの難所であった。舟運が盛んになった江戸時代以降、行き交いしていた舟が度々岩に乗り上げて転覆していた。川沿いには、浅瀬を上れない舟を陸から引っ張ったり、難破した舟を救助したりする人々が暮らしていた。それらの災いを減らすべく、川沿いには今も多くの舟守りの神様が奉られ、上郷地区に残る仁和足神社もその中の一つであること、などである。

一方、川の対岸の山の上に位置する大沼地区には、浮島で有名な浮島稻荷神社がある。この神社には1300年の歴史があり、かつては修験道の聖地であった大朝日岳へと続く道の途中に位置していたことから、多くの参拝客があった。稻荷神社は本来、「五穀をはじめすべての食物や養蚕を司る神」とされるが、大沼に浮かぶ浮島は決して沈まないことから、これまた舟の安全を祈願する人々が、遠路はるばる太平洋岸からも日本海岸からも、お参りにきていたことが確認された。

いわば、朝日町には、大朝日岳へと続く修験道の道と、最上川舟運の舟道という、今は忘れ去られかけているが歴史上重要な二本の道が存在しており（内藤正敏教授）、山上の大沼にも舟守りの神様が奉られているのである。そして、朝日町を流れる最上川の五百川峡谷には、ごく最近、全長30キロにも及ぶ舟道を掘削した跡が発見され、町ではそれを町おこしの一環としてクローズアップしている。筆者たちカヌーインストは、そのような歴史を持つ最上川で、舟守りの神様に見守られながら遊ばせていた

だいている訳である。

このような史実と現状をふまえ、筆者は、最上川に天然素材で作った人工の浮島を流し、舟守りの神様に感謝するパフォーマンスを考えることにした。

さて、筆者はこのプロジェクトを単なる個人的な作品に終わらせたくはなかった。昨年の本学紀要第15号に掲載された『大学の地域連携活動におけるグラフィックデザインの重要性』の中でも述べたが、地域との連携活動で最も大切なことは、地域の人々と心を通わせることである。口で言るのは簡単だが、筆者は地域住民の方々と学生たちに、そのことを、身を以て示すことにした。それが、地域連携活動を大学から任せられた筆者が、何をおいてもまずやらねばならないことだと自覚していたからに他ならない。

そこで筆者は、考えられるありとあらゆる手法で、このプロジェクトに地域の人々と学生、そして最上川で遊ぶカヌー仲間にも関わってもらうことにした。

実験表現研究会では、9月の展覧会「上郷採祭」に向けて、4月から度々、朝日町で合宿を行ったが、その度ごとに、筆者はこのプロジェクトについて学生たちに語りかけ、興味を持った学生を連れて、プロジェクトに協力を要請するため、様々な人に挨拶に行った。

リバーカヤックの楽しみを理解させるためには、何よりもまず、学生たちに漕いでもらいたい。筆者はまず、練習場所を最上川の対岸にある春日大沼に求め、沼を管理する八ツ沼地区の区長さんに学生を連れて挨拶に行き、沼でのカヤック練習と浮島の制作実験を許可していただいた。すぐ下に水神様が奉られている美しいこの沼は、上郷小学校から車で10分程の距離にあり、このような活動にうってつけの環境であった。

リバーカヤックの練習に興味を持った学生は当初、男女あわせて4～5名いたが、6月14日の講習会に実際に参加したのは男子2名だけであった。少々残念ではあったが、経費節減のため筆者一人で指導し、学生の装備を私物ですべてまかない運搬するには、これが適正人数であったかもしれない。練習後の学生の感想は、あまり良いものとは言えず、興味は湧いたものの、むしろ操舟の難しさと身体的疲労が勝ったようである。芸術・デザイン系の学生は、日常から体を動かす習慣に乏しいのかも

しれない。その後、特に希望もなかつたため、押しつけは禁物と考え、学生向けリバーカヤック講習会はこの1回で終わりにした。

そこで、筆者は、学生がリバーカヤックを漕がないまでも、朝日町の水環境について、もう少し学んでほしいと考え、朝日町在住の自然写真家、姉崎一馬氏に学生向けのレクチャーをお願いした。姉崎氏は二十数年前、筆者が雑誌編集の仕事でリバーカヤックに出会った頃、同じ雑誌の仕事をしていた。筆者にとってはアウトドア系出版業界の先輩である。2007年9月、五百川峡谷で行なわれた朝日町エコミュージアム協会の自然観察会で、その講師をしていた姉崎氏と共にカヌーを漕いだのが、およそ20年ぶりの再会となつた。

姉崎氏は現在、小中学生向けの自然体験教室、「わらだやしき自然教室」を奥様とともに營み、数々の本を出版している。日本全国を撮影して歩いている姉崎氏は、各地を渡り歩いた後、深い森に抱かれ朝日川にはほど近い現在の場所、「わらだやしき」こそが、自然環境教育にふさわしいと考え、朝日町に移り住んだと話してくださつた。筆者は、リバーカヤックを通じて学生たちに学んでほしいことの第一に自然環境を挙げるが、その重要な部分において、姉崎氏の力を借りたいと申し出、快諾をいただいた。

7月6日の当日は6名の学生が参加し、姉崎氏の生い立ちから自然写真家になった理由、「わらだやしき自然教室」を立ち上げるべく朝日町にたどり着くまでの経緯など、貴重な話を聞かせていただいた。「水を汚さず食器をきれいにするには、少々行儀が悪く見えても、洗う前になめるのが正解だ」と話す姉崎氏の言葉には、説得力があった。

教員や先輩に連れられて何となく朝日町の上郷地区で活動するようになり、地域住民との関わりが徐々に深まりつつあった学生たちにとって、最初から明確な目的意識を持って朝日町にやってきて、その土地を活かした活動を展開する姉崎氏の言葉は、どのように響いたのであろうか？ この話を聞いた後、学生たちが制作した「上郷採祭」のポスターに、「上郷を材料にして廃校と町に作品を生やします。」というキャッチコピーが出てきたのは大変興味深い。

同じ日の晩、朝日町の空氣神社では、洞爺湖サミットにあわせて地球温暖化を考えるイベント、「エコスタ」が

開催された。NPO法人朝日町エコミュージアム協会副理事長で蜜ろうそく職人の安藤竜二氏による、蜜ろうそく作り体験ワークショップの後、出来上がつた蜜ろうそくを神社に灯し、エコスタ宣言が採択された。（蜜ろうそくは天然素材から作られるため、環境に対してきわめてローリンパクトな灯りである。）会場には、地球環境問題に関する様々な研究成果を発表するパネルも設置されていた。

このイベントの実行委員長とスタッフの大半は地域の若者たちで、中にはリバーカヤックを漕ぐ若者もいた。高齢化の進む地域において、こういった活動の担い手たる若い力はかけがえのないものであり、それを支える安藤氏の活動には頭が下がる思いがした。そのような人たちと実験表現の学生たちが交流を持てたら、という思いもあり、時間的な無理を承知で、学生たちとともに部分的にこのイベントにも参加した。

次に、筆者は、リバーカヤックを取り入れた教育のもう一つの柱と考える、歴史・文化を皆で学ぶために、浮島稻荷神社の島祭にスタッフとして参加することを学生たちに提案した。

この祭は、毎年7月の第3日曜日に、新しい島を岸から切り出して命名する神事である。新しい島を切り出す前に沼に点在する二十数個の浮島に綱をつけて牽引し、桟橋に集める作業がある。手漕ぎのボート一艘を使い、毎年、大沼地区の住民の皆さんが協力し合って保存活動を続けていたのであるが、筆者は、リバーカヤックを使えばもっと効率よく作業できる、と神主さんに協力を申し出た。リバーカヤックはボートと違つて前向きに漕げるし、身を乗り出して転覆しても簡単に起き上がるから、その機動力はボートの比ではなく、より大胆な作業ができるのである。神主の最上さんには以前にも、内藤教授の写真の授業で、別の学生たちがお世話になつたこともあり、快諾をいただいた。

事前に何度か学生を連れて現地を視察したり、筆者がその歴史についてレクチャーをした甲斐があつて、7月20日の神事には6名の学生が参加した。本来なら学生と共にカヌーを操り、島を牽引したいところであったが、まっすぐ進むこともままならない学生たちにそれは無理と判断した。舟に乗るのは筆者一人で、学生たちは島を切り出したり、陸上からロープで牽引する役目を担つた。

伝統的で厳かな神事の中で、日頃から前衛的な表現を探求している我々の行為がどう映るか、やや心配ではあつ



上：渴水時に明鏡橋から舟道の遺構を見下ろす。画面右上が全国からカヤッカーが集まる通称タンの瀬。ここが筆者のパフォーマンス会場となった。左：上郷宇津野地区の高台にひっそりたたずむ舟守りの仁和足神社。昔は川を見下ろせたのではないだろうか。右：タンの瀬にわらだを投げ込んでみた。水圧を逃がすので壊れることはなかった。



春日大沼でカヤックを漕いだ学生たち。



カヤックの上から睡蓮の花見を楽しんだ。



沼の下にある水神様「ごほんどよ」。



浮島稻荷神社の境内にある大沼。大小二十数個の浮島が浮かぶが、放っておくと接岸して徐々に数が減ってしまう。島祭ではまず、沼中の浮島をすべて桟橋付近に集める。



新しい浮島を切り出す作業。今年は木の根に阻まれ難航を極めることとなった。



舟上の筆者にかわって祭壇に拝礼する学生。一つ一つが貴重な体験となる。



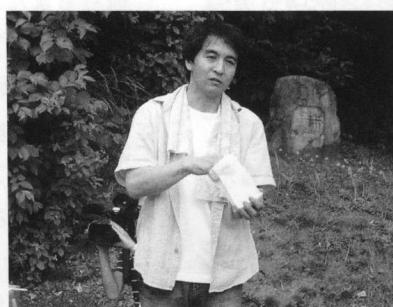
沼中の浮島を集める作業風景。筆者は力ヤックで浮島にロープをかけ、そのロープを地上の引き手に手渡す。小さな物は力ヤックで押して移動することもできる。



巫女さんたちに見送られ仲間入りする生まれたての浮島「常陸之島」。



姉崎一馬氏の講義を受ける学生たち。



朝日町の蜜ろうそく職人、安藤竜二氏。



最上川を見下ろす旧上郷小学校。

たが、神主さん、町長はじめ地域の方々に大変喜ばれた。「長い島祭の歴史の中で、カヌー（リバーカヤック）を使って作業をしたのはこれが初めてだろう。驚くほど効率よく島集めが終わった」と地元の人たちから日々に感謝された。

筆者としても、何の予備知識もなければ、決してきれいとは言えない水質のこの沼で漕ぐ気にはならないものだが、事前に歴史を学び、神主さんに舟共々お祓いをしていただいてから漕いでみると、舟守りの神様の遊び場に入れていただいたような、神聖な気持ちになるから不思議なものである。大変貴重な体験で、作品のイメージが一気に膨らんだ。公民館で行なわれた反省会では、地域の方々から、ぜひ来年も協力してほしいとうれしい言葉をいただき、学生たちも満足げであった。

さらに、その日の夕方には、学生を連れてエコミュージアムコアセンターのギャラリーで開催されていたパネル展示「再発見!! 最上川の歴史と五百川峡谷の魅力」の見学にも行き、安藤竜二氏のレクチャーを受けた。この展示会場には、本学の学生たちが博物館実習の一環として制作した五百川峡谷のジオラマをはじめ、最近発見された舟道の写真、さらには実物のカヌーまで展示されており、一連の事前学習の締めくくりとして、大変有意義であったと思う。

以上のような、大変遠回りにも思える学習機会を設けた後、筆者は自らが「上郷採祭」に出品する浮島作品のアイディアスケッチを開始した。

## 6. 最上川浮島プロジェクト 『山の記憶・川の記憶』

筆者は最上川に流す浮島を、何を素材にするか、かなり考えた。大沼の浮島は岸から分離したものである。だとすれば、筆者が制作する浮島も、五百川峡谷の川岸に何らかの関係性のあるものを素材に制作したい。そこで、目に留まったのが、かつて養蚕に使用されていた「わらだ」である。わらだは蚕を飼うための道具で、細い竹で編んだ非常に目の粗いザルのようなものである。用途によって、直径90センチほどの円形のものと、一辺が90センチほどの四角形のものとがある。上郷地区では1950年代ま

で養蚕が盛んだったので、わらだは農家に未だ残っている。試しにロープに結んだわらだをタンの瀬の激流に放り込んでみたところ、ぐちゃぐちゃにもまれても壊れなかった。筆者はこれをベースにして、その上に、当時の舟運で運んでいた荷物を象徴するものを載せることにした。

作品のタイトルは、今では忘れ去られようとしている前出の2本の道を意識して、最上川浮島プロジェクト『山の記憶・川の記憶』とした。

8月5日、筆者はアイディアスケッチを携え、NPO法人朝日町エコミュージアム協会の会合に出席した。パフォーマンス作品、最上川浮島プロジェクト『山の記憶・川の記憶』について説明し、同協会が9月7日（上郷採祭のオープニング翌日）に開催する「五百川峡谷クリーンアップ大作戦」にあわせて実施したいと協力を求めた。カヌーを使って最上川を清掃するこのイベントは2008年で3回目を迎えたが、毎年多数のカヌースタートがボランティアで協力し、年々参加者が増えている。筆者は、学生をラフトボート（エア式の大型カヌー）に乗せて一緒に清掃活動に参加させ、清掃活動終了後、きれいになった川で、浮島流しのパフォーマンスを行なうことを提案し、了承を得た。これで、カヌーを使った大学と地域の連携活動が、目に見える形で実現することになったのである。

学生たちにこのプロジェクトについて説明すると、参加希望者が4名現れた。うち3名は全くカヌーを漕いだことがなかったが、レスキュー専門家がラダーマン（舵取り役）を務めるラフトボートにまとまって乗ってもらい、周りをレスキュー艇数艇でサポートすれば問題ない。ラダーマンは全国的な川のレスキュー活動を展開する団体の東北支部長が、サポート役は、県内はもちろん、宮城や福島からもやってくるカヌー仲間たちが快く買って出てくれた。

彼らもまた、自然を敬い愛する人たちである。地域に入って活動するということは、単にその地域の住民との連携だけを考えがちである。しかし、カヌー仲間に手伝ってもらえば、我々同様、その地域に魅力を感じて集まってくる人たちとの連携も、大切で楽しいことを、学生たちに体験させることができるのである。

このような協力要請をしつつ、8月中旬、筆者は浮島の制作にとりかかった。ベースとなる「わらだ」は、地

域でかつて養蚕を行なっていた農家数軒から提供していただいた。最初はわらだをベースに、その上に青苧の茎で何か作って固定しようと試行錯誤していたが、美しいものはできなかつた。わらだの規則的な格子の美しさに合わないのである。そこで、竹ヒゴを麻糸で弓状に張つて、そこに当時の舟運の積み荷であった米を暗示する切り餅を吊るし、紅花（これも流域の特産品）を添えてみた。浮島稻荷神社は舟守りだけでなく五穀豊穣の神様であるから、実りの秋に、筆者は地域の田畠の豊作をも祈願するのである。和風モダンでポリエチレンのカヤックにもあう、現代的な解釈の浮島になつた。

果たして川に流した時どうなのだろうか？　出来上がったものをまたタンの瀬に放り込んでみると、波にもまれて転覆するも、壊れることなく流れ、時には自然に起き上がつた。糸でつり下げた切り餅と紅花を小気味よく揺らしながら、浮島は回転し、流れていく。これぞまさにリバーカヤックの守り神を連想させると感じた。浮島は、運搬の利便性を考慮し、現地で一つ20秒とかからず簡単に組み立てられるように工夫した。このようにして、折り畳めば20個いっぺんに5ナンバーのワゴン車で運べる浮島が完成した。

次に、筆者は、どんな間隔でいくつくらい流すと見栄えがするかを考えることにした。実際に水に浮かべて、写真を撮り、ボリューム感を確かめてみたかった。そこで、8月26日、円形と四角形の浮島を各4つずつ制作し、春日大沼の東屋から見下ろす位置に、いろんな間隔で並べてみた。水面に浮かべた浮島は、弓なりの竹ヒゴに風を受けて静かに水面を移動し始めた。水面の水草とともに浮島が浮かぶ風景は、何とも言えず美しかつた。筆者は当初、最上川に流した浮島は回収して旧上郷小学校にて展示するだけで終わる予定であったが、春日大沼に浮かべる方が、本来の意味からしても自然であると判断し、展示会場に加えることにした。

回収の効率を考慮し、浮島を4つずつ円形と四角形を交互に、目立たない麻ひも（約20m）で緩くつなぎ、それを水草に結びつけて放置した。浮島は、見に来るたびに、その時の風向きによって、配置を変えていた。しかも、少しづつではあるが水を吸収し、沈んでいった。時の流れに身を委ねる環境芸術である。

9月6日、実験表現研究会の「上郷探祭」はオープニ

ングを迎えた。その日の夜に開かれたパーティーには、カヌー関係者も数名参加してくれた。こんなきっかけでもなければ大学のイベントには参加しそうもないカヌー関係者が、本学教職員、学生、地域の方々と芸術作品を前に語り合うのを見て、筆者は重要な第一歩を踏み出したと感じた。イベントを通じて縁もゆかりもない人たちが顔を合わせ、互いに協力し合つて一つのことを成し遂げる、そういった行為の積み重ねが、これから時代の地域おこしに欠かせない要素だと、筆者は信じている。

9月7日、清掃活動とパフォーマンスの当日は、前日からの雨の影響で、この時期にしては水量が少々多めであった。一時は開催が危ぶまれたが、ラダーマンをお願いした伊藤淳氏と早朝に協議した結果、安全に問題があるほどではなく、ほどよいスリルが味わえると判断し、決行することになった。

まず、カヌーランドで学生とともに20個の組み立て式の浮島を車から降ろし、川岸で組み立てた。そして、流れに投げ入れる場所として選んだタンの瀬の岩の上に浮島を並べ、撮影の打ち合わせを済ませてから、清掃ツアーのスタート地点へと向かった。

手違いで予定していたラフトボートが届かないというハプニングがあったが、代わりに小さめの舟を貸してくれる友人が現れ、その舟の漕ぎ手も確保でき、事なきを得た。困った時の助け合いの精神は、これだけでも十分に学生たちに伝わったはずである。全体の安全確保をするために、レスキュー用の艇を漕ぐ予定だった筆者も、このハプニングのおかげで、その役を仲間に頼み、学生一人を同乗させ、二人乗りのダッキー（エア式カヌー）で漕ぎ出すことになった。大きな瀬に飛び込む時には、前に乗る学生に大声で漕ぎ方を指示し、びしょ濡れになりながら感動を共有する、これは学内では絶対にできないsuchな体験であった。途中、前が見えないほどのスコールに見舞われたが、過去に何十回も漕いでいるコースで、かつ、直前にも十分な下見をし、レスキューのサポート要員も確保してあったため、不安はなかった。

ゴミが大量に流れ着く場所では、みんなで上陸して手際よくゴミを回収した。川で遊ぶだけでなく、川を愛し、川に恩返しするカヌーイストたちの姿を、学生たちは目に焼き付けたに違いない。

ゴールのタンの瀬につくと、不思議と雨は止んだ。ゴミの回収がすべて終わったところで、パフォーマンスを

始めた。観衆はおよそ50名ほどいただろうか。筆者がパフォーマンスの概要を話し終えると、事前に頼んでおいた人以外にも、舟で回収の手伝いを申し出してくれる人が数人出てきた。この仕事は操舟技術のない学生には手伝えないので、大変嬉しかった。

川への感謝の気持ちを込めて岩上で手を合わせた後、筆者はカメラマンの合図にあわせて20個の浮島を、水かさの増したタンの瀬の濁流に投げ込んだ。300メートルほど川下の明鏡橋手前には、舟に乗った仲間たちが待ち受けており、流れてきた浮島を回収してくれた。最後に筆者がタンの瀬から舟を出し、途中の岩場で座礁した浮島をレスキューし、すべてを無事回収した。

悪天候にもかかわらず、関わってくれたすべての人の協力で、パフォーマンスは成功した。この感動は忘れられない。

翌9月8日には、回収した浮島を一人で春日沼に運び、数個ずつ麻ひもで緩く繋いで舟で牽引し、水草に結びつけて設置した。8月26日に設置した8つの浮島は、わらだに少々水を含んでおり、新たに設置したものと比べると明らかに沈み加減で元気なく見えた。お年寄りばかりが残った過疎の集落に若者が大挙してやってきたような、思わぬ効果を見て取れた。時々跳ねる魚、鳥の声、そよぐ風、すべてが作品を包み込んでくれた。一人静かに舟を漕ぎ、じっくりと作品を設置したからこそできる発見であった。朝日町でかつて使われていた「わらだ」を素材に作った浮島を、水神様が奉られている沼に設置する——筆者はこのアートに協力してくださったすべての人たちに感謝しながら、至福の時間を過ごした。

翌日からは、希望する学生を連れて、何度か鑑賞に訪れた。設置された作品は、東屋や遊歩道、駐車場や道路からも、様々な角度で鑑賞できるが、できれば舟に乗って実際に動かし、戯れてみると、より深く味わえると思った。春日沼には古い言い伝えがあり、岸に舟を係留すると災いが起るとされているそうだ。それは、一回ごとに簡単に持ち運べるリバーカヤック（約15kgほど）のような小舟を漕げるものだけが、楽しめる鑑賞方法なのである。

## 7. 参加者、協力者たちの感想

さて、一連のイベントに参加した学生や協力してくださった方々は、どのような感想を持ったのだろうか？アンケートや個別の聞き取り調査の結果を、以下にまとめてみる。

まずは、舟に乗った学生たちの感想から紹介しよう。

- 普通ではできない体験ができたという実感があり、それだけでも意味のあることだと思います。かつて舟運で栄えた最上川で、舟を実際に漕いでみて、昔の人たちの生業に少し触れられた、リアルな体験でした。
- 岸から見る川と流れに乗ってみる川は、まったく違った物に見え、驚きました。普段、鳥の視点で見ている物を虫の視点で見ることは大切だと思いました。
- ゴミ集めをしながら川を下ったが、ゴミよりも水質の悪さが気になった。今まで知らなかった川的一面を見ることができた。一連のカヌー関連のイベントに参加して、水を大事にしよう、という遠藤さんのメッセージが伝わってきた。
- パドルの漕ぎ方はちょっと見た目には左右同じに見えるが、実際に漕いでみると右手と左手の使い方が違い、難しかった。
- すごく楽しかったです！ カヌーの魅力が何となくわかりました！ 水や川と一体になった感じがしました。

筆者は一連のカヌー関連イベントを開催するにあたって、その企画意図をまさに意図的に語らなかった。ステレオタイプな環境教育や歴史教育、アウトドアスポーツなどのイメージを植え付けたくなかったからである。その結果、各自が感じたことをそのまま語ってくれたのではなかろうか。筆者が伝えたかったことを、それぞれがその人なりに受け止めてくれた結果であろう。

漕ぐ時の手の使い方が左右で異なるのは、向かい風の影響を受けにくくするために、パドル左右のブレードの角度がオフセットされているためである。パドルが構造的に至ってシンプルな風防対策を有するからこそ気がつくことである。最後の学生は、自分では展覧会に作品を出展せず、川下りをするためだけに飛び入り参加した。筆者はそのような学生も喜んで受け入れる。きっかけを

与えることが何よりも大切と考えるからである。この体験を各自が活かしてくれれば、それで良いと考える。

次に、舟には乗らなかったが、地上のイベントには積極的に参加した学生たちの全体的な感想をまとめてみる。

●その土地の環境を直視する良い機会であったと思います。川下りの参加者が皆、青ざめて帰ってきたので、安全面はどうだったのかと思いました。川の様子も穏やかではなかったので、少し気になりました。乗っていないのでわかりませんが、水中は好きです。カヌーの話を聞いていて、むしろ水中の方が自然なのかもしさないと、昔、思ったことを思い出しました。

●コントロールしようとしてもできないのが自然ですね。だからこそ自然には魅力があるのでしょうか。

●神経質なようですが、プラスチック製のカヌーに人工的な物を感じます。木製ではないのでしょうか？

実際に乗らなかった学生からは、体験した学生のようなリアルな言葉は出てこない。しかし、体験した仲間の様子を見たり、話を聞いたりしたことで、日常生活の中ではとりたてて考えそうもない水辺の環境について、その学生なりに考えている。川に対して恐怖感を抱いてはいても、どこか水中の世界に懐かしさを覚える感想も見られる。プラスチックの舟に対する疑問が出てくるのも、一つの成果であると考える。いずれも率直な感想だと言えよう。

次に、筆者の作品『山の記憶・川の記憶』について学生たちの感想を聞いてみた。

●供え物を川に流す、一つの儀式だと思いました。川への感謝、自然に対する敬意を表すと同時に、流れる浮島を自分と重ねているようにも思いました。天候が悪かったのも作品を引き立たせていたと思います。

●このパフォーマンスは上郷以外でもできそうな気がします。蚕のザル（わらだ）を浮島と見ることはパフォーマンスでは難しかったのですが、春日大沼の展示ではよく分かりました。沼の展示を見てからパフォーマンスを見たらもっと納得できたと思います。

●良い意味でドロ臭い作品でした。上郷の文化と風土を

新しい形で蘇らせたと思います。地域の人たちが川とどのように関わってきたか、伝わってきました。

●ダイナミックさを感じました。沼の中に突然浮島の作品があつたので驚きました。今では不要になったわらだを使って、伝統的な浮島のイメージを表現することができるのですね。

●人と川は似ていると感じました。私たちが生まれる遙か前から流れ、昔の人々が色々と見てきた川の風景を、私たちは作品を通して知ることができるのかもしれません

●実際に体験することが一番伝わるのだと思いました。学校でわらだの浮島と既製品であるカヌーを展示するだけでは、伝えるのが難しいかなと思いました。

学生たちはよく見て、自分なりの率直な感想を述べてくれたと思う。筆者は実験表現研究会の顧問ではあるが、現代芸術の専門家ではない。学生たちと共に学んでいくという姿勢を強調した成果が、学生の感想に表れているように思う。

「上郷以外でもできそうな気がする」ということは、筆者も感じている。地域の人々の暮らしと川の関係を歴史的に検証し、その結果をもとに、その地域にゆかりのある天然素材を使って今回の浮島のようなものを制作する。最後に、川と地域の人々への感謝の気持ちを込めて、それらを川に流し、舟で回収する。——そんなパフォーマンスを全国各地の川でやってみたいものである。

しかし、学生からは、筆者との関わり方について、次のような感想もあった。

●学生と同じ目線で一緒にやってくれた部分はすごくやりやすかった反面、大人であり現代GPのプロジェクトをまとめる立場の人であるが故、難しい部分もあったと感じました。

こうやって、筆者も学生たちも、お互いに他者理解を深めていくのである。

最後に、今回のパフォーマンスに協力してくださったお二方のご意見を紹介しよう。まずは、NPO法人朝日町エコミュージアム協会副理事長の安藤竜二氏から寄せら



途中の橋から川をスカウティング（下見）する。中州の左右から流れが合流する場所には、増水時に複雑で大きな波が立つ。



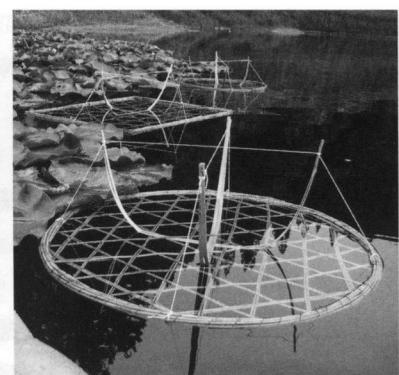
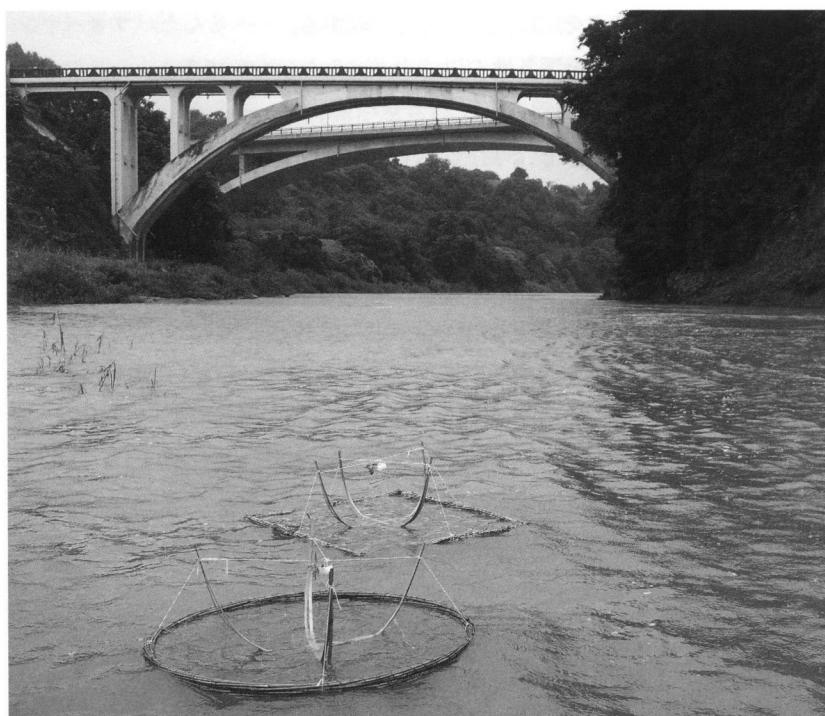
学生に手伝ってもらい、現場で浮島を組み立てる。竹ヒゴに凧糸を引っ掛けで弓なりに張り、中央に餅と紅花を吊り下げる。



川下りの途中でゴミ拾い。川が蛇行して岸に流れがぶつかる所では、軽トラックがいっぱいになるほどゴミが集まった。

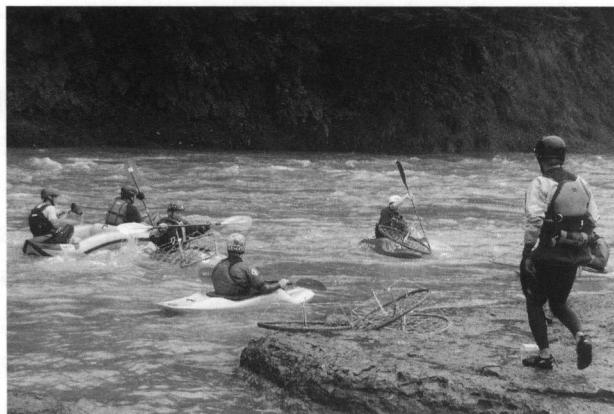


伊藤淳氏の指導でダッキーに乗船する学生たち。不安定ではあるが楽しい小舟は、それを漕ぐ人に色々なことを教えてくれる。



春日大沼に設置中の浮島。わらだをベースにした浮島に 20 メートルの麻ひもを通して数個ずつ緩く束ね、カヤックで牽引し、睡蓮の茎に緩く結びつけていく。

朝日町が誇る旧明鏡橋（手前）の下に流れ着いた筆者の浮島。タンの瀬で沈したカヤックも、増水時にはここまで流されレスキューされることがある。



明鏡橋手前の岩場が浮島回収の拠点になった。手伝ってくれたこの仲間たちがいたからこそ、この企画は遂行できたのだ。



途中の浅瀬に引っかかった浮島は、最後に自ら舟を漕ぎ、回収した。多くの仲間に支えられ、パフォーマンスは無事終了した。



タンの瀬の岩の上から、浮島を流れに投げ入れてゆく。遊ばせてくれる川に感謝の気持ちを込めて、一つ、また一つ……。



春日大沼での浮島設置作業風景。時々、丘にあがって全体のバランスを見ながら作業を進め、全部で28個の浮島を設置した。

れた言葉を紹介しよう。

●地元イベントに参加して盛り上げてくださるのはとてもいいことで、地元との絆作りの基本だと思います。特に、みんなのしたがらない、ゴミ拾いをしてくださるのはありがたいです。生まれた交流から、町内のカヌー人口も以前のように増えたらしいのですが。ベテランばかりが漕ぐカヌーランドに、地元のビギナーは入り込みづらいのが実情です。

楽しんだ分、ゴミを拾うという行為は、川や地元に対する等価交換といえます。私がエコミュージアムに精を出すのも、この町に住む私と町の等価交換だと思っています。

浮島プロジェクトは、地元文化の肯定ですから、いいと思います。激流の中、流したのも意に叶っていたのですね。ゆっくりじっくり、多くの人に見てもらいたかったですね。<sup>五百川</sup>峡谷まつりなどあつたらいいのですが……。大沼の島切りのような歴史ある祭ごとそのものに手をかけるよりも、今回のように別の形で表現なさったのは、嬉しかったです。

<sup>五百川</sup>峡谷の素晴らしさは下ってみないと分かりません。地元の人にたくさん下ってほしいと願い、川下りを企画していますが、ラフティング業者に委託すると参加費（1人6500円）がネックとなり、なかなか申し込みがありません。安価で気軽に参加できる川下り体験ツアーなど開きたいものです。（安藤竜二）

そして、もうひとつ方、仙台市カヌー協会会長 伊藤淳氏からは、次のようなコメントをいただいた。伊藤氏には当日、学生を乗せて舟を漕いでいただき、浮島の回収も手伝っていただいた。

●地域の自然や歴史・文化を在学中に学び、イベントとして形に残す。その準備段階で現状を把握し、計画を立て、情報を収集し、色々なアイテムを用意し、人やお金の手配をして当日を迎える。

人の営みの要であった自然の川、そしてそれと関わる文化、生活、これらは地域に根ざした大学教育を目指すためのツールとして機能する。それらと時空を超えて関わる今回のイベントは、学生にとっても大学にとっても、そして地域社会にとっても、有形無形の価

値あるものと実感した。（伊藤淳）

このお二人は筆者とほぼ同世代の40代である。今回のパフォーマンスは、このお二人の絶大な協力なくしては成り立たなかつた。

安藤氏は、筆者にとって、朝日町との文化交流においてなくてはならない一人である。自ら町の文化に寄与しながら、地域の若者の育成にも力を注ぐその姿には、筆者も学ぶところが多い。町の将来について明確なビジョンを持ち、時に辛口の意見をも交換できる安藤氏の存在は大きい。「かつて朝日町はもっとカヌー人口が多かったが、近年はカヌーランドに地元のビギナーが入り込みづらい」、という話は初めて聞いた。この辺りを解消し、みんながカヌーを楽しめる雰囲気を作るのも、カヌーを通じて地域に根ざした教育を考える筆者の役割であろう。

伊藤氏は、5年ほど前、レスキュー講習会で知りあつた先輩で、全国的な水難救助活動を行う、NPO法人 広域防災水難救助捜索支援機構（Japan Search And Rescue Team）東北基幹支部 支部長を務める。カヌーにとどまらず多彩なアウトドア活動、文化活動に関わり、若い世代を育成している。川で不測の事態に遭遇したとき、阿吽の呼吸で役割を分担し合える、筆者が最も信頼を寄せるレスキュー仲間の一人である。伊藤氏が、このような形で本学の教育に関わってくれるのは大変嬉しいことである。伊藤氏と話をしていると、筆者はつくづく、「カヌーは人生そのものだ」と感じことがある。

両氏はどちらも、学生にとって、学内では巡り会うことのできない教師と言えよう。本当にお世話になりました。

その他にも、たくさんの方々から貴重なご意見、ご感想、激励の言葉をいただいた。筆者のリバーカヤックを取り入れた地域教育は、皆さんの協力がなければとても成り立たないことを、改めて痛感させられる。

## 8. 反省点

リバーカヤックを大学教育に取り入れることを提唱し続けてきた筆者にとって、それが実現した2008年はひとつの契機となつた。一応の成果も上がつたと考える。し

かし、この取組はまだ始まったばかりで、課題も多い。

中でも最も残念だったのは、アシスタントとなる学生を育成できなかったという事実である。リバーカヤックに興味のある学生はいても、それを本格的に習いたい、というところまでは誰も行かなかつた。今回、会期が終わってから「自分の表現のなかにカヌーの要素を取り入れたいから、1ヶ月ほど道具一式を貸してほしい」と申し出た学生が一人だけいたが、それは卒業制作に取り組む4年生であった。

筆者は興味を持つ学生を対象に、操舟技術と水難救助法をしっかりと指導し、アシスタントとして他の学生を指導できるレベルにまで育て上げたいと思っている。そうしないことには、指導者不足で、大学での普及は難しいからである。しかし、結局、ほとんどの学生は、お客様として乗ってみて、スリルを楽しむところで留まってしまったのである。

これには、他のスポーツと同様、興味が続かないとか練習が辛い、という理由もあるうかと思うが、目に見える要因として、「舟の保管と運搬」という、カヌー独特の高い壁が横たわっているのも事実である。

筆者のようなカヌー歴の長い者は、大抵、普段はあまり使わない舟等の道具をいくつか（ちなみに筆者は計6艇）所有しており、普及活動のためなら気前よく貸し出してくれることが多い。しかし、初心者をつきっきりで指導する時間的余裕はない。本当にうまくなりたかったら、ある程度の期間、乗り続けられる舟を確保し、道具を積んで車を運転し、安全な湖などで、一人練習する必要がある。しかし、そこで問題となるのが舟の保管場所と運搬手段なのである。

舟は上級者向けの短い物でも180センチ程度はあり、初心者が前後のバランスを気にせず楽に乗れる舟は240センチ以上になる。この長さだと、一般的には専用のキャリアがないと、軽自動車に乗せるのは難しい。ちなみに筆者のところにリバーカヤックを（2艇いっぺんに！）借りにきた学生は、3ナンバーのワゴン車を所有している。これは免許も持たない学生が多い昨今では、非常に珍しい。その彼も、舟を自宅には保管できず、保管場所として指導教員の研究室を借りた。

カヌーインストにはどちらかと言えばシンプルな生活を好む者が多いが、車を所有しない人はほとんどいないし、

舟の保管場所もなんとか確保している。この二つの壁を越えるに足る強い動機を与えるべく、カヌーの魅力を伝えることこそが、カヌー指導者として最低限の努めであろう。

しかし、表からは見えにくいが、もっと根深い原因は、彼らが幼少期から受けてきた「川は汚くて危ないから近づくな」という教育にあるのではなかろうか？ 川のことを少々勉強した人なら、救助技術を身につけてきちんと下見をしておけば、カヌーで川を下るのは、自転車で交通量の多い道路を走るよりよほど安全であることが、理解できるのであるが…。川では不意に大型トラックが突っ込んでくるような理不尽な事故は、まず起こらないからである。また、探し方と時期によっては、きれいな川はまだまだがあるのである。

筆者たちが子供の頃は、東京近郊にも遊べる川がまだまだあり、廃材の発泡スチロールなどで舟を作つて漕いだり、ドジョウやザリガニを捕つたりしたものであった。カヌーはそういう遊びの延長にあり、非常に身近なものとして受け入れられるのであるが、そういう幼少期の楽しい水辺体験がない若者にとっては、良いイメージが浮かばないのかもしれない。サーフィンをする若者は今も多いが、それは、川と違つて海には、楽しい遊びの場のイメージを抱けるからではなかろうか？

筆者がカヌーを始めた1986年当時、カヌー界の平均年齢は今よりずっと低く、20代半ばの筆者には同年代の仲間がたくさんいた。女子も今よりずっと多かつた。しかし、近年はどの川へ行っても若者が少なく、漕いでいるのは多くが中高年男子といった感がぬぐえない。運転免許の取得率低下や「川は汚くて危ないところ」と繰り返し教え込まれた子供の頃の教育などが、若い世代の参入を阻んでいるのかもしれない。これは残念なことである。

## 9. 今後の展開

しかしながら、筆者は、今回の活動を終えて、リバーカヤックを中心としたカヌーが、自然との共生や持続可能な社会の確立を求められる現代において、重要な教育効果をもたらすことを再認識させられた。そして、車で一時間弱の朝日町に五百川峡谷いい ものがわというカヌーの盛んな川

を持つ本学にとって、その環境を活かさない手はないと考えるのである。

五百川峡谷は決して清流とはいがたい。いい波が立つので全国からパドラーが集まるが、普段きれいな流れで練習している人の中には、農薬等による水質の悪さを口にする者もいる。しかし、そんな川だからこそ、環境教育にはかえって都合が良いとも言えるのである。離島を除けば、川は海より人間の生活に近いところにあり、ダイレクトに人間の廃棄物の影響を受ける。田舎のきれいな川を漕いでいても、夕べお世話になった温泉宿から洗剤の泡が流れてくる、そういう体験が環境教育には必要不可欠なのである。幼少期に必要な水辺での遊びを体験していない若い世代に、その楽しさと水辺の環境の重要性を伝える最後の砦として、大学は機能できないか？

「舟の保管と運搬」という二つの壁が立ちはだかり、車も免許も持たず、川を不浄で危険なものとして遠ざける傾向にある学生たちを対象にすることを勘案し、筆者は2009年度以降、朝日町にて次のようなカヌー教育プランを考えている。

まず、芸術やデザインといった専門分野を一度離れて、純粋に生きる力を身につけるということを目的にした基礎教育に、カヌーを取り入れてみたい。

2008年度は学生とのべ1ヶ月半ほど合宿したことになるが、炊事をさせてみると、改めて今の若者に生きる力が欠如しているかがわかる。果物の皮一つ剥けない者が多いし、火の扱い方もきわめて危なっかしい。これでは食事も満足に作れない。食事は生活の基本である。芸術やデザインを学ぶ前に、彼らがまず身に付けるべきは生きる力ではなかろうか？

筆者はまず、田舎の生活の中でそれを身につけさせてやりたい。そんな生活の中で、人類が生きるために必要な道具として発明してから一万年以上に及ぶ、カヌーの長い歴史について語りたい。そして、興味を持った学生だけを対象に、まずは2～3名（これ以上だと一人では指導できない）でリバーカヤックと水難救助の訓練をする。

いきなり誰でも乗れるラフトボートに同乗させても、それは遊園地のジェットコースターと大差のない、一過性の体験で終わってしまう。大切なのは、そこ至るまでの物語である。生きるための道具として生まれたカヌー

を理解して初めて、カヌーは教育的効果をもたらしてくれるのではなかろうか？これまでの試行錯誤の中で、筆者はそのことを学んだのである。訓練には2008年度同様、春日大沼のような安全で美しい沼をお借りしたい。

ある程度訓練を積み、エスキモーロールをマスターさせたら、川へ連れて行く。川に出て、まずやらせたいことは、川の下見（スカウティング）である。川の流れは右岸から左岸まで一定ではない。場所によっては下流から上流に向かう流れもあるし、川底から湧き上がる流れもある。障害物があれば非常に複雑な流れになる。そんな流れの特徴を一つ一つ観察することにより、どのようなところに楽しみが、そして時には命を落としかねない危険が潜んでいるかを理解させる。

じつは、こういった経験が人生においてとても役立つのである。リバーカヤックは基本的に上流から下流へと流れにそって下る。部分的には後戻りできるのであるが、基本的には一方通行である。安全でより充実した川下りを楽しむには、まず、しっかり下見をして流れを理解しなければならない。そして、いざ漕ぎ出したならば、その場その場で臨機応変に対応できる瞬時の判断力、そして迷いのない大胆な行動力が要求される。それはまさに、人生の縮図と言えるのである。スカウティングを他人任せにする人は、上達（成長）が遅い。それは人生も同じである。よって、スカウティングに関しては、カヌーに興味のない学生にもぜひ経験させたい。

スカウティングの訓練ができたら、実際に漕ぎ出し、変化に富む流れを体感する。流れの中で自分なりの楽しみを見つけさせる。そして、危険を回避する方法、不幸にして危険な場所に入ってしまった場合の脱出方法をも、安全を確保した上で実践的に学ぶ。

講座の最後には、今回のクリーンアップ大作戦のように、受講者全員で川下りをしたい。漕げるようになった者にはカヤックを漕がせ、自分で漕げない者は、ラフトボートに同乗させる。このようにして、講義で学んだことをみんなで検証する。そして、その成果を自分の人生にどう活かすかを考えさせたい。

授業の評価については、レポートか、もしくはそれにかわる小さな作品を出してもらう。

この教育プランは、「町全体が博物館 住民一人ひとりが学芸員」という標語を掲げる朝日町にて、ぜひ実現させたい。

数多くの豊かな流れをもつ日本には、「水に流す」という言葉がある。良くないもの、汚いもの、見たくない物は、水に流してしまえばきれいに片付くという、都合のいい考え方から生まれた言葉であろう。しかし、カヌーに乗るようになって、筆者は「流した結果」がどうなるかを身を持って知った。そして、「水に流す」という言葉に嫌悪感を持つようになった。

この講座の受講者とは、そんな気持ちを共有し、これから社会の進むべき道について、共に考えたいと思っている。アウトドアに興味のない若者たちにも、本格的に芸術やデザインを勉強する前に、ぜひそのような価値観をベースに持つてほしいと考える。その手助けをすることこそ、リバーカヤックを人生そのものと考える、筆者の使命であろう。

## 10. おわりに

リバーカヤックの魅力を理解するのに、大した知性はない。発達しすぎた人間の知性は、むしろ邪魔になるかもしれない。そういう意味で、リバーカヤックは、智の殿堂たる大学で扱うに足る物ではない、という意見もあるかもしれない。筆者は、漕いで体で感じたことが、その魅力のほとんど全てであると考える。

人は、生命体としても生まれた本能を、もっと尊重すべきである。まずは騙されたと思って漕ぎ出してほしい。リバーカヤックは、頭でつかちな人間の社会を痛烈に批判してくれる。それが大変心地よい。第2章の最後に、リバーカヤックの魅力について箇条書きにしたが、現在の筆者にとって、リバーカヤックは単なる乗り物でもスポーツでもない。生き方の指針、人生そのものである。

このような論文を著した筆者は、自分が大学の教育スタッフとして、異端児であると認識している。今後も異端児は異端児なりに、学生のため、地域のため、世の中のためにになると確信を持てる仕事を続けていきたい。

一連のイベントの開催、および本稿の執筆に際し、一人一人お名前を挙げることができないほど多くの方々からご協力、ご助言をいただいた。本当にお世話になりました。

最後に、この場を借りて、学内の教職員に提案したい。大学には、学内でその人の専門分野とされているものは別に、様々な分野で様々な能力を發揮できる人が、多数いるはずである。これからの時代、大学という組織は、教職員の専門性に必ずしも囚われず、各自の隠された能力をもっと積極的に活用すべきであると考える。各教職員が自分の仕事を、今、与えられている専門分野の範疇だけで考えるようになると、大学全体の力はたちまち落ちていく。上司が命令できないような、各教職員独自のアイディアを、もっと自信を持って、どんどん提案しようではないか。

本稿をこの紀要に掲載してくださった大学に、心から感謝の意を表します。

---

## 参考文献

- 1) 朝日町教育委員会（1988年）『朝日町の歴史』
- 2) 朝日町エコミュージアム研究会（1994年）  
朝日町エコミュージアムの小径・第三集『名勝 大沼の浮島』
- 3) 朝日町エコミュージアム研究会（2000年）  
朝日町エコミュージアムの小径・第七集  
『よみがえれ！ 大沼浮島の響き』
- 4) NPO法人 朝日町エコミュージアム協会（2001年）  
朝日町エコミュージアムの小径・第八集『水とくらしの探検隊』

---

## 執筆者

遠藤 牧人	教務課
ENDO Makito	Education Affairs Division 教務主事（現代GP担当）